ブック

「未来に必要な資質・能力を育成するための指標として評価の転換が求められている」と、文部科学省の総則・評価特別部会委員である著者は主張している。

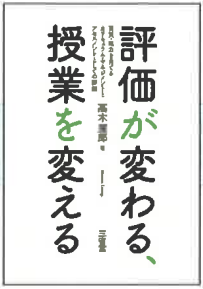
明治以降、近代日本の教育において評価は「Evaluation」であり、指導者が学習者の結果を値踏み・格付けするという意味で行なわれてきた。一方、これからの時代は、学習過程を含み学びの総体を支援する・支える「Assessment」としての評価が求められていると示されている。

本書では、次期学習指導要領において、学習評価では「何ができるようになるか＝授業のねらいを達成したかどうかを評価する」だけでなく、一人一人の子どもの資質・能力を育成するために、子どもたちが授業を通してどのように成長し、授業を通してより深い学びに向かっているかを「Assessment」の視点から評価することが重要となることが述べられている。

様々な評価方法として、「パフォーマンス」「観察」「ポートフォリオ」「ルーブリック」等が紹介されており、例えば「パフォーマンス評価」は、制作物等の作品や口頭発表という学びの成果を評価することや、実験や実技を通して、形成過程における学びを対象として行なう評価があり、学びの「過程」そのものを対象として評価することで、学ぶということをより深めたり広げたりする「Assessment」の評価として重要な意味を持つと説明されている。

そして、学習者主導で行なう「特別の教科道徳」が事例として述べられている。さらに、学校評価や授業評価、学習評価を学校教育全体として捉えるためのカリキュラム・マネジメント等についても学校現場で使用できるように具体的に示されており、これからの学校教育を創る指針となる1冊である。

（愛知教育大学教授・高橋美由紀）



評価が変わる、授業を変える
資質、能力を育てるカリキュラム・マネジメントとアセスメントとしての評価

高木展郎　著
2160円　三省堂
☎03-3295-1881